

# 『十三世紀フランス語聖書』 (*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：地域展開の諸相(2)

## Manuscripts enluminés de la *Bible française du XIIIe siècle* : divers aspects de la diffusion régionale(2)

駒田 亜紀子 Akiko KOMADA

はじめに<sup>1</sup>

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、13世紀中葉にパリで成立した、初の完訳版フランス語聖書である<sup>2</sup>。今日、断片を含め、13世紀後半から15世紀後半にかけて制作された30点余の写本作品が伝存するが、その多くは何らかの挿絵彩飾を伴う作例である<sup>3</sup>。本稿では、『十三世紀フランス語聖書』写本伝承系統 (*stemma*) 上失われたオリジナルに最も近いとされる写本の一つ、ルーアン市立図書館185 (A211) 番写本 (Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (A211) ; 以下 Rouen 185と略す) (図1-6) を取り上げ、その美術史的位置付けの検証を通じ、『十三世紀フランス語聖書』の伝承初期段階 (1270-80年代) におけるパリおよびフランス北部の写本彩飾をめぐる錯綜した状況に光を当てたい。

### 1. 『十三世紀フランス語聖書』初期写本伝承と Rouen 185の位置付け

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、サミュエル・ベルジェが1884年に公刊した中世フランス語聖書研究の第3部において、13世紀中葉にパリで成立した散文体フランス語によるラテン語ウルガータ訳聖書の初の全訳テキストを指して命名した、写本テキストである<sup>4</sup>。1884年当時、このテキストを完本の状態で収録した写本の存在は知られていなかったが、ベルジェは、聖書前半部については現存最初期の作例の一つ Fr. 899 (パリ、1270-75年頃) ほか6点の写本を、聖書後半部については同じく Fr. 899 ほか8点の写本 (Mazarine 35 ; Fr. 398 ; Reg. lat. 26 ; Fr. 6258 ; Rouen 185 ; KBR 10516 ; Fr. 12581 ; ChC178<sup>5</sup>) を、『十三世紀フランス語聖書』の失われたオリジナルに近い作例として挙げている<sup>6</sup>。

一方、ベルジェの研究では検討対象とされなかった写本や1884年当時は存在が知られていなかった写本を加え、新約聖書諸書の校訂版編纂に向けて詳細な分析・考察を行っているのが、1960年代以降に発表されたデ・ポールク、デコー、スネッドンらによる研究である<sup>7</sup>。中でも、クライヴ・スネッドンは、1978年オクスフォード大学に提出した博士論文とその後発表した雑誌論文において、『十三世紀フランス語聖書』福音書の伝承初期段階のテキストを伝える写本として、ベルジェによる上述の9写本のリストにさらに6点の作例 (Bern 28<sup>8</sup>; St-Omer 68 ; M. 494 ; Y. Thompson 9 ; Thott 7° 2 ; Chantilly 5)<sup>9</sup>を検討対

象として追加し、初期写本伝承系統図 (*stemma*) を作成した<sup>10</sup>。それによれば、『十三世紀フランス語聖書』福音書テキストの初期伝承には4つの段階 (*states*)、すなわち初期段階 *x*、これより派生した二つの相互に独立した改訂版 (*revision*) *a* および *b*、そして改訂版 *b* よりさらに派生した *b6* を識別することができる<sup>11</sup>。本論で取り上げる Rouen 185は、スネッドンによる初期写本伝承系統図では、ベルジェの「初期」写本リストに当初より含まれていた Fr. 12581、ChC178ならびにスネッドンが新たに指摘する Bern 28とともに、失われたオリジナルに最も近い初期段階 *x* に位置づけられており、校定版編集の底本とされる最重要写本である<sup>12</sup>。

## 2. ルーアン市立図書館185 (A211) 番写本 (Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (A211))<sup>13</sup> (図1-6)

287フォリオ、330 x 215 mm；テキスト欄 (2コラム50行)：230 (222) x 150 (145) mm

収録テキスト：箴言～黙示録

制作地：フランス北部 (およびパリ?)

制作年代：1280-85年頃

### (1) 写本の概要

Rouen 185は『十三世紀フランス語聖書』旧約聖書後半部 (知恵文学、預言書、マカバイ記) および新約聖書全編を収録する写本である。現状ではマカバイ記1 (fols. 154-155間) およびヨハネ伝 (fols. 216-217間) にそれぞれ一葉ずつフォリオの逸失が認められるが、これ以外に本文の欠損は無い<sup>14</sup>。

我々の聖書は、本文冒頭 (fol. 2) の上辺余白に貼付された蔵書票より、ルーアン大聖堂に由来することが知られるが、制作当初の所有者に遡る来歴は詳らかではない。ルーアン大聖堂の18世紀の蔵書銘 (fol. 1v) によれば、この時点ですでに聖書は完本ではなかったと考えられるが、今日失われた旧約聖書前半部に関する手がかりは無い<sup>15</sup>。

Rouen 185は、『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本としては平均的なサイズ・仕様の作例である<sup>16</sup>。ゴシック書体の本文は2コラム50行でレイアウトされ、聖書各書の冒頭には、3人の画家 A・B・C (後述) の手になる、テキスト欄1コラム分の幅 (63-70mm) の長方形のパネル状ミニアテュール計35点、あるいはテキスト欄の1/3程の幅を占める物語イニシアル1点 (エレミアの哀歌, fol. 91) を伴い、小預言書や書簡のうち挿絵を伴わないテキストの冒頭には本文6~10行分程度の高さの大型のシャンピ・イニシアル計16点を配する。写本サイズの大小に関わらず聖書各書の冒頭には原則として物語イニシアルを配するラテン語聖書のレイアウト (cf. 図7-10, 12) とは異質の、13世紀後半以降に台頭する世俗写本のレイアウトに準ずる形式である<sup>17</sup>。

Rouen 185の聖書本文に明確な方言色は認められないが、C.スネッドンは、14世紀初頭

に遡るピカルディ方言によるペリコーペの指示が写本随所の余白に残ることを指摘している<sup>18</sup>。1270-80年代にフランス北部で活躍した彩飾画家、通称〈ビュートの画家 (=画家 C)〉の制作への関与 (後述) より推定される Rouen 185の制作地を傍証する与件である。

## (2) 研究史

Rouen 185は、美術史研究においては、挿絵を担当する3人の彩飾画家のうちイザヤ書～ハバクク書冒頭のパネル状ミニアテールを制作した画家C (図2) に注目した一連の論考において取り上げられてきた<sup>19</sup>。我々の画家Cの単独による独創的な挿絵を多数含む詩篇集 (Los Angeles, The J. Paul Getty Museum, ms. 48)<sup>20</sup>の旧所有者の名に因み〈ビュートの画家〉と命名された<sup>21</sup>この逸名画家は、A. ストーンズらの研究によれば、平信徒の私的な祈禱に供する詩篇集やカンブレの司教定式書から世俗写本に至るまで、幅広い彩飾レパートリーを誇る。また、同画家が単独あるいは他の画家との共同作業により1274～1285年頃にかけて手がけた写本十数点の注文主／顧客は、アルトワ、フランドル、エノー伯領、あるいはテルーアンヌ、カンブレ、トゥルネー司教区に及ぶ、フランス北部地域にその基盤を持つ。A. ストーンズの2013年の論考では、その中でも特にフランドル伯一族によるパトロネージの重要性が示唆されている<sup>22</sup>。

一方、Rouen 185において巻頭の箴言や写本中最も豪華な新約聖書・マタイ伝冒頭の挿絵を担当した主要画家A (図3-5) とそのアシスタントと思しき画家B (図1, 6) については、A. ストーンズも指摘するように、我々の聖書以外にその活動を跡づけることは困難である<sup>23</sup>。ただし、主要画家Aについては、G. ヴィットゥムが1907年の著書において『梨物語 *Roman de la Poire*』 (Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 2186 : パリ、1250-60年頃) の画家との比較<sup>24</sup>を提案している。また、A. ストーンズは、作例の具体的な比較には踏み込んでいないものの、13世紀第3四半期にパリで活躍したとされる〈ヨハネス・グラッシュ工房〉<sup>25</sup>等との様式的連関を示唆している<sup>26</sup>。

以下に続く本論では、Rouen 185の挿絵彩飾について、その制作に携わった3人の画家の分業体制を写本の物理的な構成に照らして検証した上で、従来の研究では看過されてきた主要画家Aおよびアシスタント画家Bの様式的特徴を考察する。

## (3) 彩飾の構成と制作の分業体制 (挿図参照)

Rouen 185の挿絵彩飾は、その様式的特徴により、主要画家A (図3-5)、Aのアシスタントと思しき画家B (図1, 6)、前2者とは全く作風の異なる第3の彩飾画家C (=ビュートの画家) (図2) の、3人の手に帰すことができる。画家A・Bが担当した折丁と画家Cのそれとでは、そこに施される彩飾の構成要素やレイアウトが明確に異なっており、何らかの分業体制の下で制作が進められたと考えられる。

主要画家A (図3-5) および画家B (図1, 6) の担当する折丁 (1-6, 15-34) に施された装飾は、以下の要素より構成される。すなわち、① 聖書各書の冒頭に配される、テ

クスト欄1コラム分の幅を占めるパネル状ミニアテュール（図1, 3-6）、② 聖書本文の章の冒頭を示す、本文3行分の高さのシャンピ・イニシアル（図1, 3-6）、③ 冒頭にパネル状ミニアテュールを伴わない預言書（ゼファニア～マラキ書）および書簡（テモテ第1書～ヘブル書、ヨハネ第2・3書、ユダ書）冒頭に置かれた本文6-10行分程度の高さの大型シャンピ・イニシアル（画家B）、④ ページ上辺余白に配される朱・青インクによるランニング・タイトル、である。画家A・Bの担当範囲には、イニシアルからテキスト・コラムに沿ってページ上下の余白に伸びるバケットやアンテナ装飾は見られない。①のパネル状ミニアテュールの画面枠には、(1) 幅の狭いクリーム色の外枠と白の細線による波状文様を伴うブルーないしはローズの帯状の内枠より構成される二重枠（画家A）（図3-5）および(2)（白の細線による波状文様を伴う）ブルーないしはローズの帯状枠（画家B）（図1, 6）の2タイプが識別される。②③のシャンピ・イニシアルは、金地の文字本体の輪郭をなぞるように囲むブルーないしはローズの地に白の細線による簡素な蔓草文様等を配したもので、A・B両画家の担当折丁に共通して見られる形式であるが（図1, 3-6）、文字本体の先端や角から外側に突き出る楕円形モチーフの形状など細部の特徴から、パネル状ミニアテュールと同じ画家A・Bの手を折丁単位で識別することができる。

一方、画家C（=ビュートの画家）の担当する折丁（7-14）に施された装飾は、以下の要素より構成される（図2）。すなわち、⑤ 聖書各書の冒頭に配される、テキスト欄1コラム分の幅を占めるパネル状ミニアテュール（図2）、⑥ 聖書本文の章の冒頭を示す、本文4-8行分程度の高さの赤・青インクによるフィリグラ（線條装飾）・イニシアル（図2）、⑦ ⑥のフィリグラ・イニシアルからテキスト・コラムに沿って上下に伸びる赤・青インクによるバケット装飾、⑧ テキスト・コラムに沿って延伸するアンテナ装飾を伴う物語イニシアル（エレミアの哀歌、fol. 91）、⑨ ページ上辺余白に配される朱・青インクによるランニング・タイトル、である。ビュートの画家の担当する折丁には、画家A・Bの用いるシャンピ・イニシアルは見られない。⑤のパネル状ミニアテュールの画面枠には、幅の狭い金地の外枠と挿絵場面とは無関係な四連尖頭アーチよりなる二重枠が、一貫して用いられる。

聖書本文の筆写は、3人の写字生a（図1）・b（図3-6）・c（図2）が折丁単位で分担している。各写字生は写本全体を通じ所定の本文行数（50行）を遵守しながらも、異なるレイアウトの罫線を用いている。すなわち、写字生a（折丁1-6, 31-34）は、テキスト欄を超えて頁上下の縁まで延びる左右コラムの垂直方向の枠線の内側に水平方向の罫線を取り入れる一般的なタイプ（type 1：コラム幅70mm）、写字生b（折丁15-30）は、基本的にはtype 1と同様のレイアウトであるが、本文の第1行と最終行を記す水平方向の罫線を頁の左右の縁まで延長している点が異なるtype 1のヴァリエント（type 2：コラム幅65-67mm）、写字生c（折丁7-14）は、頁の外側三方の欄外余白に二重線による補助枠を伴うタイプ（type 3：コラム幅63-65mm；type 1・2に比してテキスト欄の幅が狭く欄外余

白部分が広い) を、それぞれ採用している。

折丁群	折丁	フォリオ	罫線	写字生	テキスト	挿絵配置	イニシアル	画家
1	1	2-9	type 1	a	箴言	2	シャンピ	A
	2, 3	10-23	type 1	a	コヘレト～知恵の書	12v, 15bis, 17	シャンピ	B
2	4-6	24-42	type 1	a	集会の書	24	シャンピ	B
3	7-13	43-126	type 3	c	イザヤ～ヨエル	43, 66v, 91, 93, 113v, 122, 125v	フィリグラ	C
4	14	127-134	type 3	c	アモス～ハバクク	127, 129v, 130, 131, 133, 134	フィリグラ	C
	15	135-141	type 2	b	ゼファニア～マラキ		シャンピ	B
5	16	142-149	type 2	b	マカバイ記1	142	シャンピ	A
	17, 18	150-164	type 2	b	マカバイ記2	155	シャンピ	B
6	19, 20	165-179, 179bis	type 2	b	マタイ伝	165	シャンピ	A
	21	180-186, 186bis	type 2	b	マルコ伝	181	シャンピ	B
	22-26	187-226	type 2	b	ルカ伝～ヨハネ伝	192, 212v	シャンピ	A
7	27	227-234	type 2	b	ロマ、コリント1	227, 233	シャンピ	A
	28	235-242	type 2	b	コリント2、ガラテア	238v, 242v	シャンピ	B
	29	243-250	type 2	b	エペソ、ピリピ～テサロニキ2	244v (エペソ)	シャンピ	B
8	30	251-258	type 2	b	テモテ1～ヘブル		シャンピ	B
9	31, 32	259-274	type 1	a	使徒行伝～ペトロ1	259, 272v, 274	シャンピ	A
	33	275-280	type 1	a	ペトロ2、ヨハネ1、黙示録	275v, 276v, 278v	シャンピ	B
	34	281-284	type 1	a	(黙示録)		シャンピ	B

【挿図】 Rouen 185の折丁構成と写字生ならびに彩飾画家の分業体制（折丁群 *booklet/libellus* と折丁の構成、ならびに写字生の分担範囲については、SNEDDON 1978, vol. 1, pp. 178-180 の記述に基づき、筆者が写本現物にあたり確認した。）

Rouen 185の折丁構成と写字生・画家の分業体制を一覧形式でまとめた挿図からも明らかのように、装飾の構成要素や挿絵の様式的特徴（後述）を共有する画家 A・B は罫線レイアウトの基本形式を共有する写字生 a・b の筆写した折丁で、画家 A・B とは挿絵の作風のみならず装飾の構成要素も異なる画家 C（ビュートの画家）は専ら写字生 c の担当折丁で、それぞれ制作に従事している。画家 A・B が写字生 a・b の筆写した折丁1-6, 15-30, 31-34において（同一の折丁を共有することはないが）代わる代わる挿絵を制作しているという事実は、両画家が師弟のように近い関係にあることをうかがわせる。

画家 A・B と画家 C がそれぞれ写字生 a・b と写字生 c が筆写した折丁別に截然とした分業体制を敷いているという事実は<sup>27</sup>、両グループが空間的に離れた場所で活動していた可能性を示唆する。しかしながら、C.スネッドンも指摘するように<sup>28</sup>、写字生 c/b および画家 C/B が同時に交代する折丁14/15の境 (fols. 134v/135) では、折丁14最終葉 (fol. 134v) に位置するハバクク書本文は、fol. 134v 右下欄外余白に通常通り記されたレクラムにより後続の折丁15冒頭葉に続くべき章句を明示された上で、折丁と写字生の交代を跨いで筆写が引き継がれている。写字生 c による fol. 134v 最終行の本文到達点を見届けた上で写字生 b へと fol. 135以降の本文筆写が引き継がれているのであり、写字生 (ならびに画家) の交代にもかかわらず折丁14/15が単一の折丁群<sup>29</sup> (booklet/libellus) 4 を成すと判断される所以である。

#### (4) 彩飾の特徴

Rouen 185の挿絵彩飾は、主要画家 A (図3-5)、おそらく A のアシスタントとして A と制作環境を共有する画家 B (図1, 6)、前2者とは作風の全く異なる画家 C (=ビュートの画家) (図2) の、3人の手に帰される。本節では、先行研究においては具体的な考察の対象とされてこなかった Rouen 185の主要画家 A およびアシスタント画家 B に注目しつつ、我々の聖書の挿絵彩飾の特徴を考察する。

画家 A は、巻頭の箴言や写本中最も豪華な新約聖書・マタイ伝冒頭の挿絵 (図3, 4)、使徒行伝の扉絵など、写本本文の上位分節を画す重要度の高い挿絵を担当する。画家 A の挿絵彩飾の特徴は、まず、ハイライトや陰影によるモデリングの乏しい平面的な賦彩と、色面を区切る黒の輪郭線や衣襷の描き起こし線を主体とする形態把握に求められる (図3-5)。ややくすんだ色調の青・赤・朱・サーモンピンク・白に少量のエメラルド・グリーンを伴うパレットは、13世紀後半のフランス写本彩飾における標準的な色彩構成を示す。

画家 A の描く、頭部のやや大きいプロポーションの人物は、立像の場合、肩から腰にかけて緩やかな弧を描くマントに身を包み、ドラプリーは緩やかな平行線を描きつつ下降する。座像の場合、人物の纏うマントは、腰から下肢にかけての丸みを帯びたシルエットをなぞり、両膝の間に U 字状の襷を落とす。マントの縁や衣の裾あるいは頭光には、輪郭をなぞるように白の細線が引かれる。

逆三角形気味の人物頭部は、側面観を好んで描くビュートの画家 (図2) とは異なり、多くの場合、斜め四分の三正面観により捉えられる。片側に黒目を寄せて見開いた眼、これに並行するように三日月型のくっきりした弧を描く眉、眉から直線的なラインを描きつつ降下する鼻梁、小さくすぼめた口を特徴とする相貌は、男女を問わない。男性頭部の場合、額のほぼ中央で左右に分けられた頭髪は、左右の耳から項にかけてゆるやかなループ状のウェーブをなす。顔面や頭髪あるいは手指は、頬に点じた赤味を除き、白い地塗りと輪郭描き起こし線により描写される。

以上にその概略を示した、Rouen 185の画家 A の賦彩や人物の形態把握、あるいはドラプリの特徴は、パリを含む北フランス・ゴシック様式の1260-80年代の挿絵彩飾にも共通して認められる特徴であり<sup>30</sup>、しばしば指摘されるように、13世紀後半におけるパリ写本彩飾様式の広範な浸透を例証するものと言えよう<sup>31</sup>。

パリを含む北フランス・ゴシック様式の1260-80年代の挿絵彩飾が程度の差はあれ共有する一般的な様式傾向とは別に、人物把握、とくに相貌の表現において、Rouen 185の画家 A に共通する特徴を示すのは、上述のように、A. ストーンズが「Rouen 185の主要画家」との様式的連関を指摘した<sup>32</sup>、いわゆる〈ヨハンネス・グラッシュ工房〉<sup>33</sup>の名を冠した作品群である。R. ブランナーが1977年刊行の遺著において提示した同工房の帰属作品(図7, 8)には様式的なばらつきが少なくないが<sup>34</sup>、筆者がRouen 185の画家 A との比較において特に注目するのは、『サン・モール・デ・フォセのラテン語聖書』(Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 11543-11547) 中に見られる物語イニシアルの一つである(図8)<sup>35</sup>。ブランナーによれば複数の画家により彩飾されたこの複数巻構成の聖書のうち、問題のイニシアルは、預言書を含む第4巻(Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 11546)に見出される。イザヤ書冒頭の物語イニシアルに描かれた、画面中央に跪くイザヤと画面向かって右側で鋸を挽く刑吏の頭部は、片側に黒目を寄せて見開いた眼とこれに並行する眉、直線的な鼻梁のラインなどが、我々の画家のそれに酷似する。

画家 B (図1, 6) は、写字生 a および b が筆写した折丁群の内部で画家 A と代わる代わる挿絵を担当し(挿図参照)、パネル状ミニアテュールやシャンピ・イニシアルの基本的な意匠を画家 A と共有する、アシスタントと思しき画家である。ハイライトや陰影によるモデリングの乏しい平面的な賦彩や、色面を区切る黒の輪郭線や衣襷の描き起こし線を主体とする形態把握などの基本的な彩飾技法、ややくすんだ色調の青・赤・朱・サーモンピンク・白に少量のエメラルド・グリーンを伴うパレットも、画家 A と共通する特徴である。

画家 B の描く人物は、画家 A のそれに比して寸胴気味であり、立像の場合、長衣の上に纏うマントの襟が項を覆う高さまで引き上げられていることもあって、そのシルエットは抑揚に乏しい。短衣の男性立像の衣の裾は(図1)、両膝の間に直線的な角を作る単純化されたシルエットを描く。座像人物の纏うマントの腰から下肢にかけてのシルエットも、画家 A のそれ(図3-5)に比して、より単純化されたコンパクトな輪郭を描く。人物の相貌は、王冠を頂く人物(図1)を除き、画家 A のそれに比して面長で四角ばっており、眼は小さいが、頭髪の表現はよく似ている。

総じて、画家 B の描く人物は、画家 A のそれに比べ、輪郭線や細部の描き起こし線がやや生硬であり、人物のシルエットもよりコンパクトに単純化されていると言える。同様の指摘はシャンピ・イニシアルにも当てはまり、画家 B の描くそれは、画家 A に比べ、幾分大味な印象を与える。

画家 A および B は、建築モチーフを利用した画面構成や人物の周囲を埋める背地の扱いにおいても、基本的な造形言語を共有している。

両画家の描くパネル状ミニアテュールにおいては、画中人物周囲の背地は金泥で塗り込められ、背地をブルーないしはくすんだローズ系の碁盤目状の文様で埋める画家 C (= ビュートの画家) (図 2) とは、扱いが異なる。二重枠 (上述) で囲んだ挿絵画面の内側に、登場人物の人数に応じて、単一あるいは二連アーチによる建築モチーフ枠をしばしば描き (図 1, 5)、ブルーないしはくすんだローズにより賦彩されたアーチのスパンドレル部分には、白色の細線により蔓草文様を施す。アーチの形状は、画家 A の場合、緩やかな弧を描く尖頭アーチの内側に三つ葉型の削り型を重ねる意匠を専ら用いるが (図 5)、画家 B は切妻型アーチの内側に三つ葉型の削り型を重ね、スパンドレル部分には白色の細線による単純な幾何学文様を反復する場合が多い (図 1)。画面内の登場人物を囲むアーチ状の枠取りが、町並みを想起させる小さな塔や屋根型、あるいはアーチを支える柱の基部を嵩上げしたような柱礎により、擬似的な建築表現へと強化される場合もある (図 5)。

上述のアーチ状建築モチーフが13世紀後半のフランス写本彩飾に広く認められるのに対し<sup>36</sup>、Rouen 185の画家 A および B が描く、画面枠より一回り小さい矩形の細枠と前者に内接する菱形の細枠を重ねた奇妙な意匠の内枠 (図 3, 6) は、類例を見出し難い。菱形の内枠は、パリのサント・シャペルの旧約聖書を主題とするステンドグラスなど「物語の窓」と通称される同時代のステンドグラスの鉄枠や、ミサ典書のカノンに描かれるいわゆる〈栄光のキリスト〉図あるいは詩篇集冒頭の全頁大挿絵の内枠など<sup>37</sup>に時折見られるが、Rouen 185のようなパネル状ミニアテュールのレイアウトに採用された例は稀である。現時点で筆者が見出した得た比較例は、福音書記者像を囲む内枠として物語イニシアルの内部に菱形枠を描いた、13世紀前半おそらくパリで制作されたラテン語聖書である (図 9, 10)<sup>38</sup> (Rouen 185でも、菱形の内枠は、福音書記者マタイを描くパネル状ミニアテュール (図 3) に見出される)。

#### (5) 13世紀パリの聖書彩飾写本と Rouen 185

ヨハンネス・グラッシュ工房に帰される『サン・モール・デ・フォセのラテン語聖書』中の人物像 (図 8) と Rouen 185の画家 A のそれとが示す強い様式的類似性や、菱形の内枠は、画家 A および B が13世紀パリ写本彩飾との‘親近性’—彩飾画家としての形成期をパリで過ごしたか?—を持つことを示唆する。ここでは、さらに、Rouen 185の画家 A (および B) が、人物表現の様式や装飾意匠といった一般的な特徴に加えて、13世紀パリのラテン語およびフランス語訳聖書の具体的な挿絵図像にも通じていた可能性を指摘したい。

Rouen 185の新約聖書・マタイ伝冒頭の扉絵 (図 3, 4) (画家 A) は、折丁群 6 冒頭葉 (fol. 165) の左コラム全体を占める《エッサイの樹》と右コラム上端の《福音書記者マタイ》の計 2 点のパネル状ミニアテュールより構成される。左コラムの《エッサイの

樹》は、矩形枠の底辺に置かれた寝台に横たわるエッサイの腹部から上方へと鎖状に伸びる装飾的な蔓草と、5つの鎖状ループの内側に座すキリスト・聖母と3人の王、ループの結び目の左右のスペースに立つ計4人の預言者を描く。横たわるエッサイの腹部から垂直方向に伸びる蔓草ループ等の内側にキリストや聖母、先祖の王たちを配すタイプの《エッサイの樹》は、マタイ伝冒頭のイニシアルL (*iber generationis...*) の縦棒 (*haste*) を樹幹に見立てるラテン語聖書の物語イニシアルの意匠 (cf. 図10) に由来する<sup>39</sup>。《エッサイの樹》を象る物語イニシアルL自体は、13世紀パリのラテン語聖書におけるマタイ伝冒頭の挿絵として、特段珍しいものではない<sup>40</sup>。

しかしながら、物語イニシアルに替わりパネル状ミニアテュールを配することの多い『十三世紀フランス語聖書』では、マタイ伝冒頭の扉絵として《エッサイの樹》を描く場合、大別して二つの異なる解決策を採ることになった。すなわち、① Rouen 185に見られるように (図3, 4)、エッサイの子孫を垂直方向に並べた縦長のパネル状ミニアテュールをコラム一杯に描くタイプ、② 正方形に近い形状のパネル状ミニアテュールにおいて、垂直方向に並べるエッサイの子孫は1~2世代程度に限定し、作例によっては左右のスペースに伸ばした蔓草の内側にも祖先を描き込むタイプ、である。タイプ①の作例は、Y. Thompson 9, fol. 188 (図11)、Reg. lat. 26, fols. 226-226v、Chantilly 5, fol. 227v<sup>41</sup>など、いずれも13世紀最終四半期パリの制作とされる作例に、集中的に見出される。これに対し、タイプ②の作例としては、ChC 178, fol. 7<sup>42</sup>、KBR 10516, fol. 193、St-Omer 68, fol. 156v<sup>43</sup>など1270-80年代フランス北部の作例や、フランス北部と関連の深い〈パリ-アッコンの画家〉<sup>44</sup>から派生した画家の手になる Thott. 7° 2, fol. 306が挙げられる<sup>45</sup>。1280-85年頃のパリの制作とされる Y. Thompson 9 のパネル状ミニアテュール (図11) は、エッサイの子孫を囲む5個のメダイオンを掲げた樹幹の左右に展開する蔓草の間に巻紙を携えた預言者と思しき人物を配し、蔓草の織りなすアラベスク文様の背地を金泥、ブルー、ローズで交互に塗り込める意匠を示す。Rouen 185のそれ (図3) に比べ格段に手の込んだ構図ではあるが、Rouen 185の画家 A がマタイ伝扉絵のモデルとして参照した図像も、同様のタイプであったと思われる。

Rouen 185の《エッサイの樹》に関して、もう1点、13世紀パリ写本彩飾の造形意匠の流れを汲む細部に注目したい (図4)。エッサイの腹部から立ち上がった幹は直後に左右に分かれアラベスク文様を描く装飾的な蔓へと転ずるが、V字状に枝分かれする叉の部分からは同時に第1世代の王を囲む鎖状の蔓草ループが発し、上下に重なる幹とループの叉部分は奇妙な三角形の細枠により絡めとられている。左右対称の弧を描くアラベスク文様と三角形等の幾何学図形を組み合わせた意匠は、興味深いことに、先に画家 A との強い様式的連関を指摘したヨハンネス・グラッシュ工房の挿絵を含む『サン・モール・デ・フォセのラテン語聖書』 (Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 11543-11547)<sup>46</sup> 中の装飾イニシアルに (上下逆転した状態で) 見出される (図7)。この種の装飾イニシアルは13世紀後半~14世紀初頭のパリ写本彩飾を特徴づける造形語彙の一つであり、我々

の画家 A が同時代のパリ写本彩飾に通暁していたことを強く示唆するものである。

Rouen 185の画家 A の持つ聖書の挿絵図像レパートリーと13世紀パリのそれとの関わりは、さらに、ヨハネ伝冒頭のパネル状ミニアテュール（図5）にも認めることができる。同扉絵は、屋内に居ることを記号的に表現する三つ葉型アーチと細い支柱により囲まれた、執筆中の福音書記者を描くが、ヨハネを擁するアーチの左右には銃眼を持つ塔あるいは柱が控え、アーチの上方には、さらに、三角屋根を戴く7基の塔が並んでいる。ヨハネを囲むアーチ上方の7基の塔は、アーチと画面枠上辺の間の余剰スペースを充填するために描かれたようにも見えるが、同時代のパリで制作されたラテン語聖書の物語イニシアルを参照するならば、ヨハネの黙示録1-3章が語る「七つの教会」を暗示するモチーフであることが判明する。13世紀パリのラテン語聖書の場合、複数基の塔を戴くアーチに囲まれた執筆中のヨハネは黙示録冒頭の物語イニシアル（図12）<sup>47</sup>に登場するが、Rouen 185ではアシスタントの画家 B に任された黙示録扉絵に代わり、画家 A はヨハネ伝扉絵にこの図像を転用したのであろう。

Rouen 185に関する以上の考察では、1270-80年代にフランス北部で活躍したビュートの画家を含む3人の画家の手になる同写本の挿絵彩飾に、13世紀パリのそれに特徴的な造形要素が認められることを、主要画家 A およびアシスタント画家 B による人物表現や二次的装飾意匠のレパートリー、あるいは聖書挿絵図像の具体的な比較検証を通じて、明らかにしてきた。研究の現状では、画家 A および B が実際に Rouen 185の挿絵制作に携わった地域を具体的に特定することは、困難である。しかしながら、本論の考察を経て改めて注目すべきは、『十三世紀フランス語聖書』の普及初期段階におけるフランス北部への同写本テキストの浸透を例証する Rouen 185において、フランス北部のいわば土着様式を強くアピールする強烈な個性の持ち主であるビュートの画家（図2）と13世紀パリ写本彩飾のオフシュートとも位置づけられる画家 A および B（図1, 3-6）とが、折丁群の共有という緊密な連携を前提とする分業体制の下で、挿絵彩飾の制作に従事しているという事実である。今後の研究では、13世紀後半における『十三世紀フランス語聖書』の急速な地域伝播とあたかも軌を一にするような、パリ・地域間の写本彩飾画家の交流や連携に関する考察も進めてゆきたい。

### 3. 結語にかえて

本論の考察は、『十三世紀フランス語聖書』福音書テキストの失われたオリジナルに最も近い写本の一つである Rouen 185の美術史的位置づけを検証し、1280-85年頃フランス北部で制作されたと考えられる同写本に同時代のパリ写本彩飾のオフシュートが根付いているという、錯綜した状況を明らかにするものである。しかしながら、『十三世紀フランス語聖書』研究の主流であるテキスト研究においては実質的な検討に付されることが殆どなかった Rouen 185の錯綜した制作状況を巡る我々の議論の射程は、同写本1点の問題に

留まるものではない。

13世紀後半フランスにおける地域の枠を越えた彩飾画家の活動・交流や彩飾写本市場の有りよう、就中フランス北部とパリ／イル・ド・フランス地方のそれは、13世紀中葉にパリで成立したとされる『十三世紀フランス語聖書』の伝承初期段階におけるフランス北部での急速な浸透<sup>48</sup>や、1291ないしは1297年にギアール・デ・ムーランがアルトワ地方で編纂した『歴史物語聖書 *Bible historiële*』のパリにおける爆発的な普及<sup>49</sup>、あるいは〈パリ-アッコンの画家〉とその派生様式を示す画家たちのパリおよびフランス北部での活躍<sup>50</sup>など、13世紀最終四半期における散文体仏語訳聖書写本の展開それ自体に関わる問題視座でもある。『十三世紀フランス語聖書』の個々の作例の挿絵彩飾をめぐる考察は、13世紀後半における散文体仏語訳聖書写本の展開というより大きな研究の枠組みに、改めて一石を投じる視座ともなろう。

**【本論で取り上げる『十三世紀フランス語聖書』主要写本の略号一覧】（アルファベット順）**

- ・ Bern 28 = Bern, Burgerbibliothek, ms. 28 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：フランス南西部、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 13, pp. 161-164; 拙論、2013。
- ・ Chantilly 5 = Chantilly, Musée Condé, ms. 5 (mss. 4 & 5) 『十三世紀フランス語聖書』完本・後半部（箴言～黙示録；前半部は ms. 4）：パリ、1300年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 1, pp. 142-144。
- ・ ChC 178 = Oxford, Christ Church Library, ms. 178 『十三世紀フランス語聖書』新約聖書（4福音書～黙示録）：フランス北部、1270年代前半？ cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 28, pp. 191-194; 拙論、2012。
- ・ Fr. 398 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 398 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：パリ、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 21, pp. 175-176。
- ・ Fr. 899 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 899 『十三世紀フランス語聖書』部分（創世記、出エジプト記、民数記～詩篇、4福音書、使徒行伝、公同書簡（ヤコブ、1ペトロ、2ペトロ）、黙示録）：パリ、1270-75年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 4, pp. 148-151; 拙論、2009。
- ・ Fr. 12581 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 12581 『十三世紀フランス語聖書』4福音書を含むフランス語テキスト集成：シャンパーニュ地方／フランス北部、1284年。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 29, pp. 194-197。
- ・ KBR 10516 = Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique / Koninklijk Bibliotheek van België, ms. 10516 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：フランス北部、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 14, pp. 164-165; 拙論、2011。
- ・ M. 494 = New York, The Morgan Library, ms. M. 494 『十三世紀フランス語聖書』

完本：パリ、1280年代初頭。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 3, pp. 146 -148 ; 拙論、2010。

- ・ Mazarine 35 = Paris, Bibliothèque Mazarine, ms. 35 (= olim ms. 684) 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：フランス北部、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 18, pp. 169 -173.
- ・ Reg.lat. 26 = Vatican, Biblioteca Apostolica Vaticana, ms. Reg. lat. 26 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：パリ、1290年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 25, pp. 184 -185.
- ・ Rouen 185 = Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (= olim A 211) 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：フランス北部、1270-80年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 23, pp. 178 - 181.
- ・ St-Omer 68 = Saint-Omer, Bibliothèque d'Agglomération, ms. 68 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：フランス北部、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 24, pp. 181 - 184 ; 拙論、2011。
- ・ Thott. 7°2 = Copenhagen, Royal Library, ms. Thott. 7°2 『十三世紀フランス語聖書』後半部（詩篇～黙示録）パリ、1290-1300年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 15, pp. 165 -166.
- ・ Y. Thompson 9 = London, British Library, Yates Thompson ms. 9 (= olim Additional ms. 41751) 『十三世紀フランス語聖書』完本・後半部（箴言～黙示録；前半部は London, British Library, Harley ms. 616）：パリ、1280-85年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 2, pp. 144 -146.

#### 【図版キャプション一覧】

- 1 Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (A 211), fol. 17 : *Bible du XIIIe siècle*, Sagesse
- 2 Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (A 211), fol. 130 : *Bible du XIIIe siècle*, Jonas
- 3 Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (A 211), fol. 165 : *Bible du XIIIe siècle*, Evangile selon saint Mathieu
- 4 Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (A 211), fol. 165 (détail) : *Bible du XIIIe siècle*, Evangile selon saint Mathieu
- 5 Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (A 211), fol. 212v : *Bible du XIIIe siècle*, Evangile selon saint Jean
- 6 Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (A 211), fol. 242v : *Bible du XIIIe siècle*, Epître aux Galates
- 7 Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 11545, fol. 393v : *Bible latine de Saint-Maur des Fossés*
- 8 Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 11546, fol. 2v : *Bible latine de Saint-Maur des*

*Fossés*

- 9 Saint Petersburg, Bibliothèque publique, ms.Lat.Q.v.I, 227, fol. 299 : *Bible latine*
- 10 Orléans, Bibliothèque municipale, ms. 12, fol. 278 : *Bible latine*, Evangile selon saint Mathieu
- 11 London, British Library, Yates Thompson ms. 9, fol. 188 : *Bible du XIIIe siècle*, Evangile selon saint Mathieu
- 12 Le Mans, Médiathèque Louis Aragon, ms. 262, fol. 280v : *Bible latine*, Apocalypse

註

1 本稿は、筆者が2002年度に鹿島美術財団より研究助成を受けた研究について2003-2004年に発表した2件の研究報告（「13世紀フランスを中心とする聖書図像の伝播・交流に関する研究—『十三世紀フランス語聖書』写本挿絵の展開—」鹿島美術財団編『鹿島美術研究年報』第20号別冊、平成15（2003）年、p. 471-480、および2004年5月鹿島美術財団にて口頭で行った研究報告）においてその概要を示し、平成19-22年度科学研究費補助金（基盤研究C）対象の研究課題（課題番号19520101「中世後期の西ヨーロッパ彩飾写本に見られる十字軍遠征の影響に関する基礎研究」）において発展させた、『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本研究の続編である。

2 『十三世紀フランス語聖書』写本テキストに関する主要な研究としては、拙論「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：最初期の作例について」、『実践女子大学美術学』第23号（2009）、pp. (39) - (53)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：〈パリ-アッコンの画家〉帰属作品について」、『実践女子大学美術学』第24号（2010）、pp. (39) - (55)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：フランス北部の作例と〈パリ-アッコンの画家〉をめぐって」、『実践女子大学美術学』第25号（2011）、pp. (17) - (38)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館所蔵《新約聖書》について」、『実践女子大学美術学』第26号（2012）、pp. (17) - (37)、拙論「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：地域展開の諸相」、『実践女子大学美術学』第27号（2013）、pp. (21) - (42)の各論文において引用した文献、および以下の註4、7を参照。

3 主要な『十三世紀フランス語聖書』挿絵入り写本については、註1に引用した拙論2003中のリストを参照（修正の必要あり）。

4 BERGER (S.): *La Bible française au Moyen Age. Etude sur les plus anciennes versions de la Bible écrites en prose de langue d'oïl*. Paris, 1884, 3e partie. Cf. MEYER (P.), C.R. de BERGER 1884, in : *Romania*, XVII (1888), pp. 121-141.

5 KBR 10516 と St-Omer 68については拙論2011、ChC 178については拙論2012を参照。

6 BERGER 1884, pp. 111-119, 448.

7 Cf. DE POERCK (G.), *La Bible et l'activité traductrice dans les pays romans avant 1300*, in : *Grundriss der romanischen Litteraturen des Mittelalters, vol. VI : La littérature didactique, allégorique et satyrique*, Heidelberg, 1968 - 1970, 2 vols., I, pp. 21 - 48 & II, pp. 54 - 80 ; DECOO (W.), *La Bible française du XIIIe siècle et l'Evangile selon Marc. Remarque critique*, in : *Romanica Gandensia*,

12 (1969), pp. 53 - 64 ; SNEDDON (C.R.): *A Critical Edition of the Four Gospels in the Thirteenth-Century Old French Translation of the Bible*. Ph. D., 2 vols., University of Oxford, 1978 ; Idem., The "Bible du XIIIe siècle": its Medieval public in the light of its manuscript tradition, in : LOURDAUX (W.), VERHELST (D.), éd., *The Bible and Medieval culture*, Leuven, 1979, pp. 127 - 141 ; Idem., Pour l'édition critique de la Bible française du XIIIe siècle, in : *La Bibbia in Italiano tra Medioevo e Rinascimento. Atti del Convegno Internazionale, Firenze, Certosa del Galluzzo, 8-9 nov. 1996*, Firenze, 1998, pp. 229-254 ; Idem., The Origins of the 'Old French Bible': The Significance of Paris, BNF, ms. fr. 899, in : *Studi francesi*, CXXVII (1999), pp. 1 - 13 ; Idem., Rewriting the Old French Bible : the New Testament and Evolving Reader Expectations in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries, in : SAMPSON (R.), AYRES-BENNETT (W.), éd., *Interpreting the History of French. A Festschrift for Peter Rickard on the occasion of his eightieth birthday*. Amsterdam / New York, 2002, pp. 35 - 59 ; Idem., On the creation of the Old French Bible, in : *Nottingham Medieval Studies*, XLVI (2002), pp. 25 - 44 ; Idem., The Old French Bible. The first complete vernacular Bible in Western Europe, in : BOYNTON (Susan), REILLY (Diane J.), éd., *The Practice of the Bible in the Middle Ages. Production, Reception, and Performance in Western Christianity*, New York : Columbia Univ. Press, 2011, pp. 296 - 314 ; BURGIO (E.), I volgarizzamenti oitanici della Bibbia nel XIII secolo (un bilancio sullo stato delle ricerche), in : *Critica del testo : Storia, geografia, tradizioni manoscritte*, VII/1 (2004), pp. 1 - 40 ; QUEREUIL (M.), *La Bible du XIIIe siècle. Edition critique de la Genèse*, Genève, 1988.

8 Bern 28については拙論2013を参照。

9 これら6写本のうち、M. 494, Y. Thompson 9, Chantilly 5は、いずれも、1884年当時にはその存在が知られていなかった完本の作例に属する。

10 C.スネッドンによる福音書伝承系統図は、1978年の博士論文掲載のそれ (p.64) が最も包括的であり上記以外の写本の伝承系統も示しているが、それ以降の論文において修正が加えられている。本稿では、1998、1999年およびこれを継承する2002年 (*Festschrift*) 発表論文のそれに従う。2002年発表の伝承系統図からは制作年代の遅い Paris, BnF., ms. fr. 6258が除外されている。Cf. SNEDDON 1978, t. 1, p. 64 ; Idem., 1999, p. 10 ; Idem., 2002, *Festschrift*, p. 38。Cf. 拙論2013, p. 22, 挿図A。

11 初期段階  $x$  から区別される3段階は、ウルガータ訳ラテン語聖書やその註解を改めて参照し初期段階に無い註解等を追加したマイナーな改変 (改訂版  $a$ )、訳語や文体のブラッシュアップを主たる目的に改訂版  $a$  とは別個に行われた改変 (改訂版  $b$ )、そして改訂版  $b$  にウルガータ訳ラテン語聖書を参照した結果を更に加味した改変 (改訂版  $b6$ )、とされる。また、これら4段階のうち、初期段階  $x$  および改訂版  $b6$  の系統に属する写本は本来の『十三世紀フランス語聖書』後半部のみである (すなわち『増補版歴史物語聖書』後半部の作例は含まれない) のに対し、改訂版  $a$  からは『増補版歴史物語聖書』最初期の作例である3写本が派生し、これら3点以外のすべての『増補版歴史物語聖書』後半部は改訂版  $b$  に由来するという。初期段階  $x$  および改訂版  $a$ ,  $b$ ,  $b6$  の詳細については、SNEDDON 1998, p. 240-242を参照。

12 SNEDDON 1978, vol. 1, p.4-5, 86-87, 92-96, 111-127.

13 Cf. BERGER 1884, pp. 119, 383 ; OMONT (Henri), *Catalogue générale des manuscrits des bibliothèques publiques de France, Tome 1 (Département) Rouen*, Paris, 1886, pp. 39 - 40 ; DOSDAT

(Monique), LESERVOISIER (Jean-Luc) éd., *Le livre saint en Normandie. Bibles manuscrites et enluminées, VIIIe - XIIIe siècles*. Avranches, Bibliothèque municipale, 1995, p. 18, fig. 60, 61 ; SNEDDON, 1978, intro pp. 4 - , 178 - 181 ; Idem., 1999, p. 7, 10 - 13 ; Idem., *Festschrift 2002*, p. 53. note 16.

14 Cf. SNEDDON 1978, vol. 1, p. 179.

15 写本には14世紀以降の所有者の筆になると見られる書き込みが数カ所に認められる。すなわち、①本文末尾 (fol. 284v) に断片的に残る蔵書銘 'Iste liber est ... . Si quis eum abstulerit vel furatus fuerit, anathema sit. Fiat, fiat.' (14世紀)、②表表紙内側に貼付けられた羊皮紙に痕跡が残る蔵書銘 (化学薬品により消去され判読不能；15世紀?)、③巻頭の遊び紙 (fol. 1) に痕跡が残る、おそらく①と同一人物の手になる蔵書銘 (化学薬品により消去され判読不能)、④巻頭の遊び紙 (fol. 1) に天地逆転して書き込まれた署名 'Jehan Prevost' (16世紀)、である。写本は18世紀にはルーアン大聖堂の所有となっていたことが本文冒頭 (fol. 2) 貼付の蔵書票 'BIBLIOTH. ROTHOMAG.' 及び巻頭の遊び紙裏面 (fol. 1v) の銘文より知られる。同銘文によれば、この時点ですでに写本は聖書前半部を伴わない状態であったと考えられる ('Cette partie de la Bible appartient à la Bibliothèque de Rouen...')。大聖堂の蔵書はフランス革命後にルーアン市立図書館に移管され、今日に至る。

16 これまで拙論において取り上げてきた『十三世紀フランス語聖書』の作例の写本サイズは以下の通り：Fr. 899 (270 x 200 mm ; cf. 拙論2009, p.39) ; M. 494 (385 x 280mm ; cf. 拙論2010, p.42) ; KBR 10516 (340 x 220mm ; cf. 拙論2011, p.18) ; St-Omer 68 (290 x 215mm ; cf. 拙論2011, p.21) ; ChC 178 (350 x 270mm ; cf. 拙論2012, p.18) ; Bern 28 (345 x 250mm ; cf. 拙論2013, p.24)。

17 Cf. GABORIT-CHOPIN (D.) et al., *L'Art au temps des rois maudits. Philippe le Bel et ses fils 1285 - 1328* (catalogue d'exposition, Paris, Grand Palais), Paris, 1998, cat. 173, pp. 265 - 266 (article par Fr. AVRIL). 13世紀パリのラテン語聖書については、BRANNER (R.), *Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis*, Berkeley, 1977 ; DE HAMEL (Ch.), *The Book. A History of The Bible*, London, 2001, pp. 114 - 139を参照。

18 SNEDDON 1978, vol. 1, p. 180.

19 STONES (Alison), The Illustrated Chrétien Manuscripts and their Artistic Context, in : BUSBY (Keith), NIXON (Terry), STONES (A.) et WALTERS (Lori), éd., *Les manuscrits de Chrétien de Troyes / The manuscripts of Chrétien de Troyes* (2 vols.), Amsterdam, 1993, vol. 1, pp. 227 - 322, en esp. pp. 245 - 250, fig. 60, 61 ; Eadem., Stylistic association, evolution and collaboration : charting the Bute painter's career, in : *The J. Paul Getty Museum. Journal*, 23 (1995), pp. 11 - 29, en esp. p. 20, 24, 28 & fig. 20 ; Eadem., *Le livre d'images de Madame Marie. Reproduction intégrale du manuscrit Nouvelles acquisitions françaises 16251 de la Bibliothèque nationale de France*, Paris : Cerf / Bibliothèque nationale de France, 1997 (Mémoire des couleurs), p. 18 & note 2 ; Eadem., L'enluminure au temps de Jeanne de Constantinople et de Marguerite de Flandre, in : DESSAUX (Nicolas) et al., *Jeanne de Constantinople, comtesse de Flandre et de Hainaut*, Paris : Somogy / Lille : Ville de Lille, 2009, pp. 177 - 189, en esp. p. 186 ; Eadem., *Gothic Manuscripts 1260 - 1320. Part One. 2 vols. (vol. 1: Text & Illustrations ; vol.2: Catalogue)* (A Survey of Manuscripts Illuminated in France), London : Harvey Miller, 2013, vol. 2, *Catalogue*, pp. 63 - 64 (帰属写本のリスト), cat. III -

- 52 & 53, pp. 289 – 296, en esp. pp. 291, 293, 294 ; AVRIL in exposition Paris 1988, cat. 199 – 201, pp. 294 – 298.
- 20 Cf. STONES 1995 ; Eadem., 2013, vol. 2, no. III – 52, pp. 289 – 293.
- 21 STONES 1993, p. 246, fig. 59.
- 22 STONES 2013, p. 291.
- 23 Cf. STONES 1993, p. 247 & note 84 ; Eadem., 1995, p. 20 & note 29 ; A.ストーンズは Rouen 185 においてビュートの画家に加え主要画家とそのアシスタント ('the first painter and another assistant') の関与を指摘しているが、これらの共同制作者 2 人を具体的に識別しているわけではない。
- 24 VITZTHUM (G.), *Die Pariser Miniaturmalerei von dem Zeit des Hl. Ludwig bis zu Philipp von Valois*, Leipzig, 1907, p. 109 : "Die kleinen Titelbilder der Salmonischen Bücher zeigen die koloristische Gesamthaltung der "Poire" …". 『梨物語』の画家については、STONES 2013, cat. I – 10を参照。
- 25 〈ヨハネス・グラッシュ工房〉については、BRANNER 1977, pp. 82 – 86, 222 – 223, figs. 212 – 243を参照。
- 26 STONES 1995, p. 27, note 29.
- 27 A.ストーンズによれば、Rouen 185においてビュートの画家が挿絵を担当した折丁 7 – 14の本文筆写を手がけた写字生 c は、同画家が単独で挿絵を制作した世俗写本 (Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 15106) の本文筆写にも、他 1 名の写字生とともに、従事している。Cf. STONES 2013, no. III-53, pp. 293 – 296 ; cf. Exposition Paris 1998, cat. 201, pp. 297 – 298.
- 28 SNEDDON 1978, vol. 1, pp. 179 – 180.
- 29 複数の写字生・彩飾画家間の分業の現実的な最小単位は折丁 (gathering) であるが、多くの場合、分業は折丁群 (booklet / *libellus*)、すなわち、先行するテキストの末尾以下のスペースを折丁最終葉まで白紙のまま残す一方、後続テキストの筆写を新しい折丁の冒頭から始めること (改丁) により生じる、(複数の) 折丁 (およびテキスト) のまとまりを単位として組織される。複数の写字生・彩飾画家が同時並行的に作業を進めることができる。
- 30 13世紀第 3 四半期のパリ写本彩飾に見られる典型的な人物表現については、例えば、拙論2009、図 1, 2を参照。
- 31 Cf. Exposition Paris 1998, cat. 230, pp. 330 – 331 (article par Fr. AVRIL).
- 32 STONES 1995, p. 27, note 29.
- 33 〈ヨハネス・グラッシュ工房〉については、BRANNER 1977, pp. 82 – 86, 222 – 223, figs. 212 – 243を参照。
- 34 本稿で論ずる余裕は無いが、R.ブランナーの1977年の著書が提唱する、13世紀パリ写本彩飾における「アトリエ」概念、とりわけその帰属作品の編年については、再考の必要があろう。この問題に関する簡潔だが的を射た指摘として、STIRNEMANN (P.), *Le Psautier dit de Saint Louis*, in : STIRNEMANN (P.) & THOMAS (M.), *Der Psalter Ludwigs des Heiligen. Ms. lat. 10525 der Bibliothèque nationale de France*, Graz, ADEVA, 2011, pp. 37 – 44, en esp., p. 42 – 43を参照。
- 35 BRANNER 1977, pp. 85 – 86, 222 – 223, figs. 5, 193, 230, 233, 235, 237, 238, 241を参照。
- 36 13世紀後半のフランス写本彩飾にしばしば見られるアーチ状の建築モチーフの例としては、いわ

ゆる『聖王ルイの詩篇集』が名高い。Cf. STIRNEMANN & THOMAS, 2011.

37 13世紀後半のフランス写本彩飾における挿絵画面内部の菱形の内枠の例として、以下を参照：BRANNER 1977, figs. 58, 232, 248a, 284.

38 Saint Petersburg, Bibliothèque publique, ms. Lat.Q.v.I, 227, fols. 289, 299; cf. MOKRETSOVA (I. P.), ROMANOVA (V. L.), *Les manuscrits enluminés français du XIIIe siècle dans les collections soviétiques 1200 - 1270*, Moscou, 1983, pl. p. 110 (Paris ? XIIIe siècle, 1/2); Orléans, Bibliothèque municipale, ms. 12, fol. 278 (Paris ? XIIIe siècle, 1/4); cf. PELLEGRIN (E.) et al., *Catalogue des manuscrits médiévaux de la bibliothèque municipale d'Orléans*, Paris : C.N.R.S., 2010 (Documents, études et répertoire, 78), pp. 9 - 10.

39 〈エッサイの樹〉については、*Lexikon der christlichen Ikonographie*. Freiburg im Breisgau, 1974, Bd 4, cols. 549 - 558 « Wurzel Jesse »を参照。

40 例えば、BRANNER 1977, figs. I, 102, 124, 313 - 315, 355.

41 各作例の概要ならびに基本参考文献については、本論末尾の略号一覧を参照。Reg.lat. 26の場合、fol. 226右コラム全体を占めるパネル状ミニアテュールでは予定した図像が収まりきらなかったためか、裏面の fol. 226v 左コラムの上半分にもエッサイと2世代分の子孫が繰り返されている。

42 拙論2012、図1参照。

43 拙論2011、図9参照。

44 〈パリ-アッコンの画家〉とフランス北部との関連については、拙論2010, 2011を参照。

45 Bern 28 (フランス南西部)、Fr. 899 (パリ)、Fr. 398 (パリ)、Fr. 12581 (シャンパーニュ地方?)、M. 494 (パリ)、Mazarine 35 (フランス北部?) は、この図像の挿絵を持たない。

46 Cf. BRANNER 1977, pp. 85 - 86, 222 - 223; figs. 5, 193, 230, 233, 235, 237, 238, 241.

47 Le Mans, Médiathèque Louis Aragon, ms. 262, fol. 280v (Paris, 1282 - 1297); cf. BRANNER 1977, pp. 229; STONES (A.), *Les manuscrits du cardinal Jean Cholet et l'enluminure beauvaisienne vers la fin du XIIIe siècle*, in : *L'art gothique dans l'Oise et ses environs (XIIIe - XIVe siècle). Colloque international organisé à Beauvais les 10 et 11 octobre 1998 par le G.E.M.O.B.*, GEMOB, 2001, pp. 239 - 266, en esp., pp. 262 - 263.

48 この問題については稿を改めて論じる予定であるが、差し当たり、拙論2011、2012を参照。

49 1300年以降のパリ写本市場における『歴史物語聖書』の急速な普及については、KOMADA (Akiko), *Les illustrations de la Bible historique : les manuscrits réalisés dans le Nord*. 4 vols. Thèse de Doctorat Nouveau Régime, Université Paris IV - Sorbonne, 2000を参照。

50 Cf. 拙論2010, 2011。

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

12

11